
The Baseball War

藤藤ワタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Baseball War

【Nコード】

N9417Y

【作者名】

藤藤ワタル

【あらすじ】

2040年のプロ野球界。それは、十年前から参入してきたメジャーのチームに圧倒され、日本のチームが九年間全く優勝の出来ないうまさに暗黒時代だった……。

そんな暗黒時代の中、一人の日本人プロ野球選手が『革命』の狼煙をあげる!!

日本プロ野球界の逆襲を描く百の物語、開幕!

プレイボール プロローグ（前書き）

この作品に登場する個人名、組織名、チーム名、大会名等の一部は、現実のものを参考に実際の名前を使っているものもありますが、この作品はフィクションであり、それらと実在する人物、団体、大会とはなんの関わりもなく、全て作者の想像です。

プレイボール プロリーグ

2006年。野球日本代表がWBワールドベースボールクラシックCで優勝したことをきっかけに、日本プロ野球界は目覚ましい発展を遂げた。

WBCの連覇を皮切りに、その二年後から始まったMLBのワールドチャンピオンとの日米頂上決戦、ファイナルワールドシリーズ（通称FWS）での日本の三年連続勝利。更には日本人メジャーリーガーの増加、活躍により、日本プロ野球への注目度は右肩上がりだった。

しかし、それは同時にMLBの反感を買う結果を招いてしまった。

日本の野球が世界一として不動の地位を確立し始めた2030年。MLBは日米野球の更なる発展の為と称し、日本プロ野球界へのメジャーチームの参入を申し出た。

それは、日本プロ野球界が最も恐れていたことでもあった。

確かに、日本プロ野球のレベルは確実に上がっていた。メジャーの選手と比べても、全く見劣りしない程に。

しかし、それはトップクラスの選手は、の話だ。まだまだ先発メジャー以外や二軍の選手とメジャーの二軍に該当するAAAの選手を比べると、どう考えても後者に軍配があがる。それにFWSで勝てたのも、日本の緻密で繊細な野球があつてこそだった訳で、チームの選手層の厚さや年間150試合近くを戦う事を考慮すると、どう考えても日本のチームに勝ち目は無いと考えられた。

しかし、それは日本野球機構（通称NPB）や選手達本人の意見であり、メディアやファンはメジャーチームの参加に大いに盛り上がっていた。

日本野球機構もその流れには逆らえず、大論争の末にメジャーからの六球団を加え、全三リーグでの新制度を導入する事を決定した。

そして時は流れ2040年3月。シーズン開幕を直前に控えたこの時期に、選手達からは全く覇気が感じられない。

それもそのはずだ。ここ9年のシーズン、どのリーグでも日本のチームがペナントレースで優勝したことがなかったのだから。

これは、ある一人の日本人プロ野球選手から始まった、日本プロ野球界の逆襲劇を辿る百の物語。

第一球 革命児

「じゃあ、行ってきます」

練習後の監督室。俺がそう告げると、監督はただ一言「ああ」とだけ言って、すぐに何かの書類に目を移してしまった。

監督室を出た俺は、一息を零す。

監督には感謝している。

今シーズンから初めて指揮を取ることになった佐沢監督は、三年前までここ、読売ジャイアンツでプレーしていた選手で、39歳で引退した後コーチを経て今年から監督となった。

春のキャンプでは若手の指導に熱心に取り組み、開幕が控えたこの時期まで、まさに粉骨砕身という言葉の通りにチームのレベルアップに奮闘してきた。

そんな監督だ。肉体的にも精神的にもかなり無理をしているはずなのに、それでも俺の我が儘を聴き入れてくれた。

きっと、監督にも思うところがあったのかもしれない。

監督は現役時代、中距離バッターのスペシャリストで、走攻守全ての揃った天才打者だった。しかしメジャーのチームが参入して来てからは思うような成績が上げられず、随分と苦悩もあったらしい。

だから今回の俺の――端から見れば異常とも言えるような行動に

もGOサインを出してくれたのだろう。

俺は、送り出してくれた監督の思いに答えるため、ゆっくりと――でも、俺や日本プロ野球界にとってはきつと大きな一歩を踏み出した。

扉の向こう側は、何処か異様な空気に包まれているようだった。

この目の前にあるタッチ式の自動ドアの向こうにあるのは、選手や監督が記者会見を開く為の特別外来応接室だ。

そう。俺は今からここで記者会見を開くことになっている。内容についてはまだ伏せてあって、記者の間では怪我や婚約など、様々な憶測が飛び交っているようだ。

意を決し、そっとドアのパネルに手を沿えた。

ゆっくりと開くドア。たちまち視界がフラッシュによって白くそまる。

集まった記者達の視線を一身に浴びながら壇上へ上がる。

これでよかったのだろうか？

今更ながら自問する。

これで、何かが変わるのだろうか？

その問いの答えを、俺はまだ知らない。俺はただ火種を撒くだけ

なのだから。

「皆様、今日は自分の勝手な都合で御集まり頂き、ありがとうございます
います」

第一声は思ったよりしっかりとした声が出て、少し安心する。

「この場に御集まり頂いたのは、私のある『宣言』を皆様に聞いて
頂くためです」

途端に、ざわついていた空気しんと静まり返る。

「その、宣言とは？」

何処からか、そんな問いが投げ掛けられる。

「はい」

一言そう言って、深く深呼吸する。

大丈夫、不安は無い。

監督や、チームメイト、他にもいろんな人達に背中を押してもら
って、ここに今立っているんだ。

だからこそ、俺は宣言する。

「私、読売ジャイアンツ主将駒原 球児は、日本プロ野球界に『革
命』を起こすことを宣言します」

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9417y/>

The Baseball War

2011年11月29日14時51分発行